

ひとたびは

ポプラに

臥^ふす①

宮本輝
Miyamoto Teru

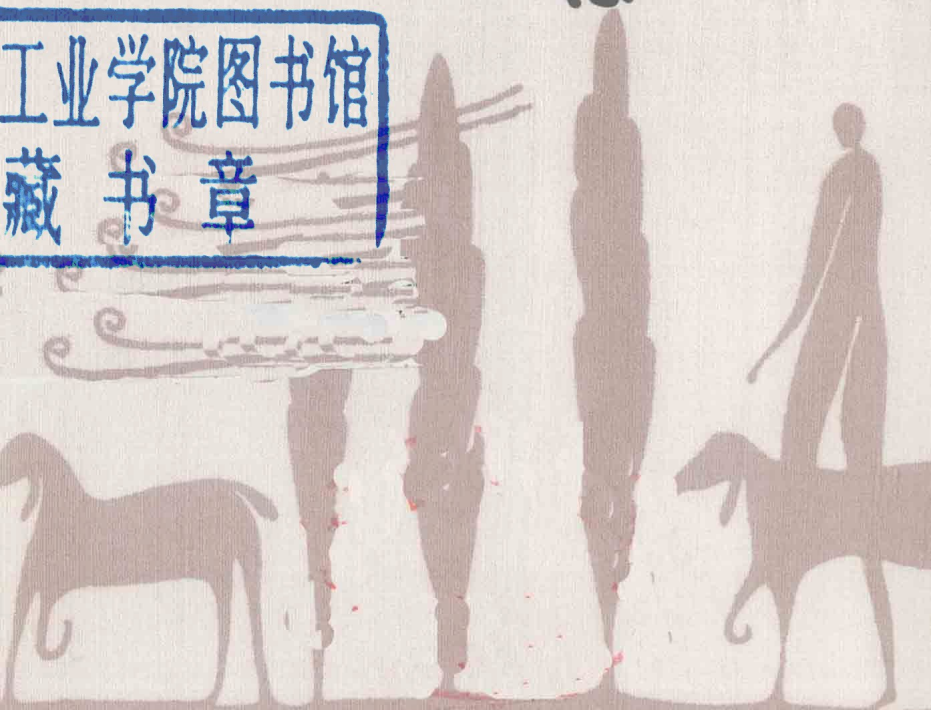


宮本輝

Miyamoto
Teru

ひとたびは
ポプラに
臥す^ふ①

工業学院図書館
蔵書章



一九九七年二月五日 第一刷発行

✧著者——宮本輝 みやもとてる © Teru Miyamoto 1997, Printed in Japan

✧発行者——野間佐和子

✧発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二―二 郵便番号一―二―一八〇〇一
文芸図書第一出版部(〇三)五三九五―二三五〇四
書籍第一販売部(〇三)五三九五―三六二二
書籍製作部(〇三)五三九五―三六一五

✧印刷所——株式会社精興社

✧製本所——株式会社若林製本工場

ひとたびは ポプラに臥す^ふ 1

✧——定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での
例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは

文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

旅の始まりに

宮本 輝

私は二十七歳のとき、鳩摩羅什くまろじゆという人物のことを知った。

新聞だったのか、なにかの雑誌だったのかはよく覚えていないが、とにかくほんの十数行の簡略な文章であった。

西紀三五〇年ごろ、いまから約千六百年前に、シルクロードの要衝・龜茲国きじこく（現在の中国新疆ウイグル自治区・クチャ）に、国王の妹の子として生まれ、七歳で出家し、九歳のとき母とともに天竺へ留学の旅に出たあと、小乗仏教にたちまちに通達し、やがて大乘仏典に出会い、そのサンスクリット語の膨大な經典の漢語訳を生涯の使命と決める。

そのとき羅什は十二、三歳の少年だった。類まれな頭脳は、中国だけでなく、周辺諸国にも伝わっていたという。

自分の国の滅亡や、囚われの身として約十六年間の苦難の生活ののち、五十歳のころ、請われて長安（現在の中国陝西省の西安）に行き、そこで妙法蓮華經、大品般若經、十住經、維摩經、阿彌陀經、大智度論、中論、成実論等の、三百余巻に及ぶ經典の珠玉の翻訳を成し終えて、六十歳のころに没した。

この鳩摩羅什の存在と、彼の漢訳經典なくしては、現在の仏教の流布は有り得ない……。要約すれば、そのような文章であった。

仏教への興味の有り無しにかかわらず、西紀三五〇年ごろに、そのような少年が生まれ、生き、己に誓ったことを成しとげて生を終えたという歴史的事実は、私の心に深く捺おされて消えなかった。私も、私の出来る分野において、そのように生きたいと思ったのだった。

そして、私はいつの日か、鳩摩羅什が歩いた道を自分も歩こうと決心したが、その機会を得ないまま、約二十年が過ぎた。

人間の情熱はうつろいやすい。

だが平成七年、あの阪神大震災が起り、私の家も壊れてしまった。

私はあの日、所用で富山市にいたし、幸運にも家族も無事であった。

だが、斜めにひしゃげてしまった家を目にして、悲惨なありさまの書齋に入ったとき、私は慄然りっぜんとなり、もし家にいたら、自分は死んでいたか、あるいは死に及ぶほどの怪我をしていたに違いないと思った。

地震が起こったあの時間、私は書齋にいる確率が高かったのだ。

その後、仕事で再び富山市に行き、北日本新聞社の上野隆三社長と酒を酌み交わしながら雑談し

た際、鳩摩羅什のことを話すと、上野氏は、社が全面的に応援するから、ぜひ羅什が歩いた道を歩いてみないかと勧めて下さった。

「大変な旅ですよ」

あまり丈夫ではない私には臆する気持ちが強くて、そう答えたのだが、上野氏は本気だった。

私はふと阪神大震災を思い、あのとき自分は死んだのだと考えれば、シルクロードの七千キロに及ぶ旅など、たいしたことではないという気になったのだった。

そしてその年、私は、北日本新聞社文化部の大割範孝記者、当時、写真部記者であった田中勇人記者、私の秘書の橋本剛くん、次男の大介とともに、西安からパキスタンのイスラマバードに至る六千七百キロの旅をやりとげることができた。

「ひとたびはポプラに臥す」は、その旅の記録である。

文明の十字路と呼ばれ、民族の十字路とも称されるシルクロードで、私は何を見て、何を感じたのか。

ひたすらつづく酷暑とゴビ灘と蜃気楼と竜巻以外、何もない広大な地帯にあっては、一本のポプラの木陰がどれほどありがたいものかを痛切に知り、おそらく千六百年前、留学のためにタクラマカン砂漠を横切り、険難なカラコルム渓谷を母とともに越えた少年にとっても、一本のポプラの木陰は、ひとときのたえようのない休息を与えたことであらうと思った。

そこで私はこの紀行文を「ひとたびはポプラに臥す」と題し、北日本新聞紙上で週に一度の連載をつづけてきた。

日本の殺伐としたシステムと生活にあつて、私たちは多くのものを失ないつづけているが、「静かに深く考える時間、静かに深く感じる時間」の喪失は極めて重要な問題だと思う。

天山南路、西域北道を経て進むシルクロードの苛酷な日々にあつて、私は「静かに深く考える時間、静かに深く感じる時間」を取り戻したような気がする。

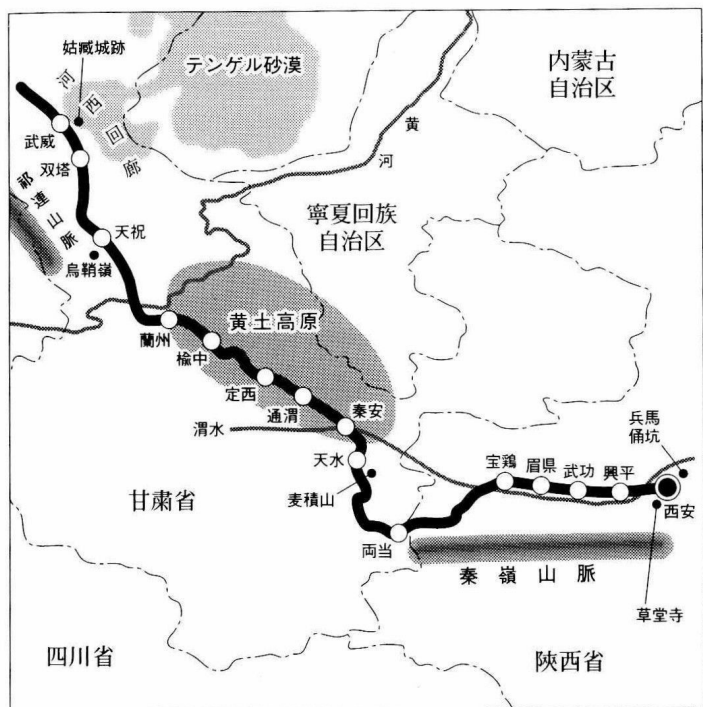
内政には不干渉であるべきだという原則にのつとれば、私は中国についていささか失礼なことも書いている。

しかし、私は「そのように感じた」から「そのように書いた」のであつて、他意はない。

この紀行文によって、読者のかたがたが、たとえひとときにせよ、文明や民族の十字路にたたずみ、芯を失なつた日本という国の、うるさすぎる日々や、明るすぎる夜から、多少なりとも自由になつていただけるならば、私にとって望外のしあわせである。

それでは、昼間の気温四十二度の、なんにもない、ただそこで生まれて生きて死ぬ人間がいる、しかし貧しくとも、いまの日本の人々よりもはるかに真摯で純情な恋があり、優しくて寡黙な強い家族のつながりがあり、生きるためにしたたかで烈しく勇気のある人々のいる、シルクロード六千七百キロの旅に、いざ行かん。

ひとたびはポプラに臥す^ふ
1



目次

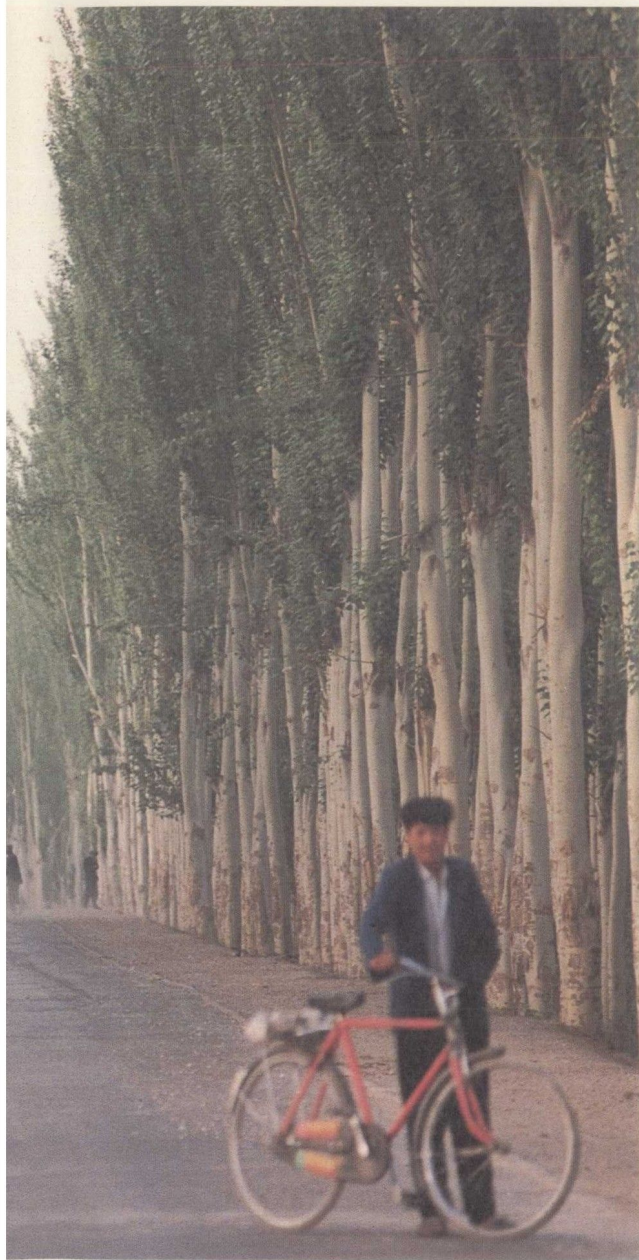
旅の始まりに
1

第1章✧少年よ、歩きだせ
4

第2章✧麦の道
52

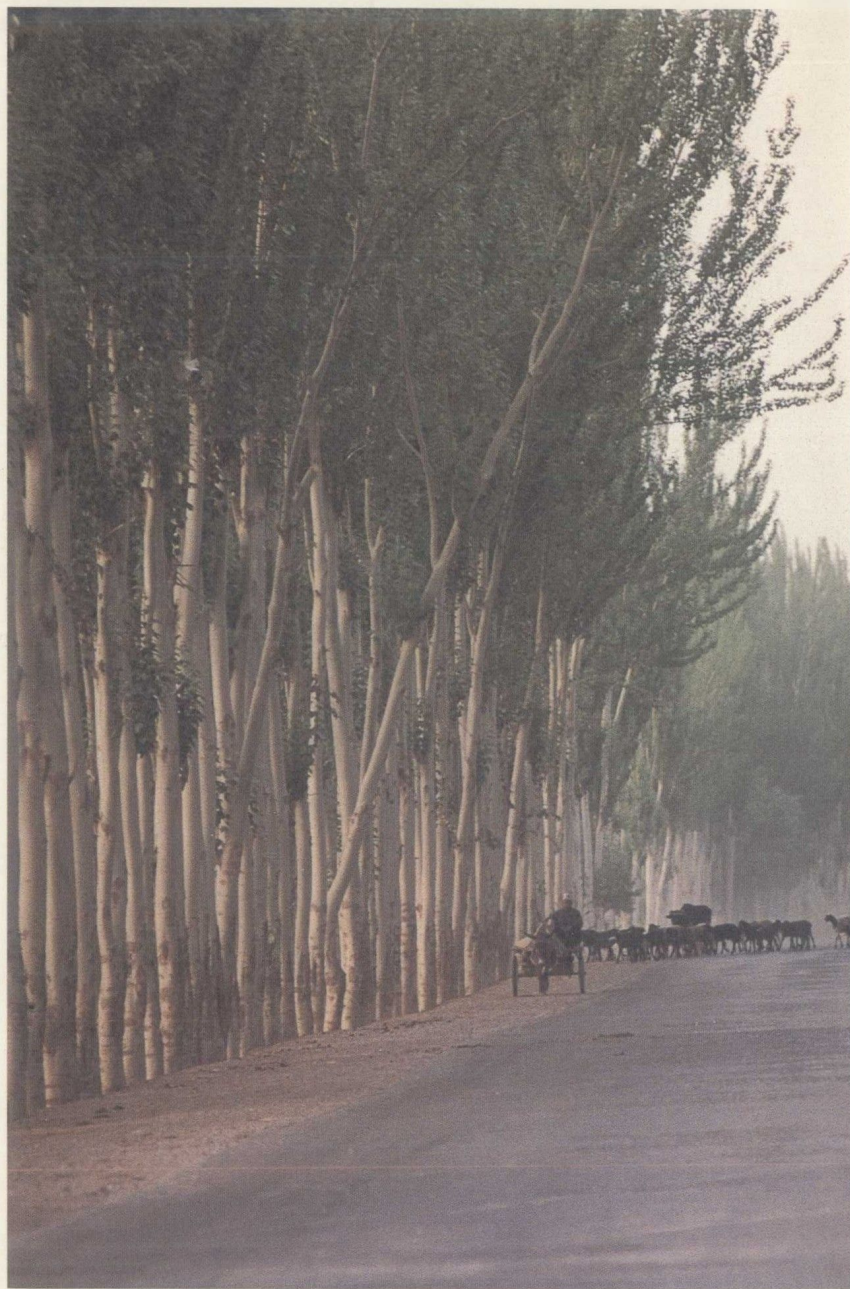
第3章✧麻雀を考えついた国
104

第4章✧ターパンツイー
180



少年よ、歩きだせ

【第一章】



ただひたすら長くて虚^{むな}しい六千七百キロの道を、私は約四十日かかって車で旅をしてきた。

日本を発^たつたのは一九九五年五月二十五日で、帰国したのは七月一日である。

六千七百キロが長いのは当然としても、その旅のあいだ、なぜ絶えず不思議な虚しさのなかにあったのか、私にはまだ正確に分析できないでいる。おそらく、生涯、あの虚しさの理由は言葉にできないような気がする。

毎日毎日、予定の道程を進むことに精力のほとんどを費して心の余裕がなかったのか、あるいは多くの人が感じるというロマンなるものを、私の感性はすくいあげることができなかったのか、それすらもわからない。

そこで私は、旅をしながら書きつづった日記とか、架空の誰かにあてて書いたまま投函しなかった手紙とかを整理し、それらも交えながら、私が旅先でいかなる風の音を聴き、いかなる人々の汗と生活を見つめ、いかなる町のたたずまいに背を向け、いかなる太陽と熱風にあえいだかを伝えたいと思う。

これを読もうとする人は、まず大きな世界地図をひろげることが肝要である。

そして、地球という惑星が、気が遠くなるほどの空間を有する無始無終の宇宙にあつ

ては、針の穴ほどの大きさにも劣る、いつかは必ず消滅するであろう微小な星にすぎないことも、あらためて認識しておかなければならない。

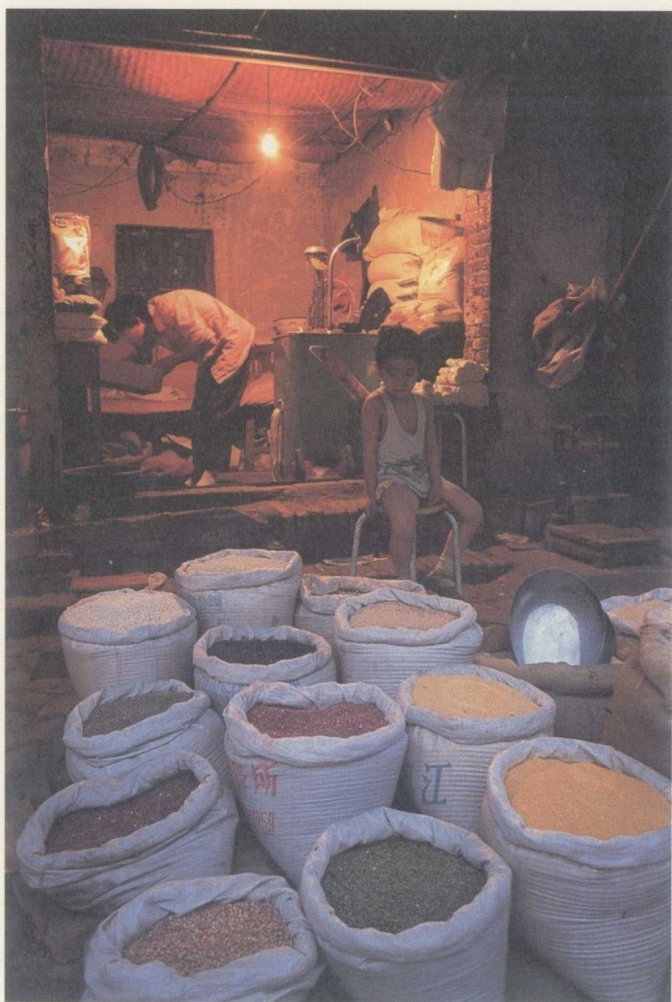
私が旅をしてきたのは、中国領では陝西省の西安から新疆ウイグル自治区南西端のタシクルガンまでであり、そこから標高約五〇〇〇メートルのクンジュラープ峠を越え、パキスタン領に入って、フンザからイスラマバードまでの、いわゆるかつてのガンダーラ地方である。

その道は、いわずとしたシルクロードであり、仏教伝来の道でもあった。

それなのに、私は、目醒めたときも、猛暑の道を進んでいるときも、オアシスの木陰でひといきついているときも、眠りにつくときも、ひよつとしたら眠っているときでさえも、執拗な虚しさから解き放たれることはなかった。

だが近松門左衛門は〈虚実皮膜〉という言葉を使っている。それは近松の物語論であるにしても、〈虚〉があれば、〈実〉はコインの裏表としてあらわれるはずにちがいない。

私につきまとった〈虚〉と皮膜一枚のところに、いったいどんな〈実〉が秘められていたのかも、私は私の日記や手紙を読み返すことで発見しなければならぬ。



西安

それではこれから、あの西安から秦嶺^{しんれい}山脈にわけ入り、西域北道を進んだのち南下し、タクラマカン砂漠の西を横切り、クンジュラープ峠を越えてカラコルム溪谷からかつてのガンダーラへと至る旅を振り返ることにしよう。

前略

今夜、西安に着きました。

八年振りに目にする西安の変わりようについては、また別の機会に触れるとして、名古屋空港から西安への直行便である中国西北飛空会社の機内で、二十年前に、あなたに熱を込めて語った私の言葉を思い出し、それを何度も胸のなかでつぶやきました。

おぼえていらつしやいますか。そう、「少年よ、歩きだせ」という言葉です。

その言葉をあなたに口にする前に、私はこうも言ったはずだ。

「二十八歳なんて、子供だよな。でも、おれたち人間が生きては死に、生きては死にを繰り返しながら、始めもなければ終わりもない宇宙の生命と混ざり合ってるんだって考えれば、百歳の老人だって少年にすぎないよ。少年よ、歩きだせ。おれは鳩摩羅什^{くまらじゆう}という人のことを考えるたびに、少年よ、歩きだせって言葉を自然に胸のなかでつぶやいて